

2021年に期待する

～渋沢栄一から学ぶアフターコロナ戦略

岡田 晃 (おかだ・あきら)

大阪経済大学 客員教授／経済評論家



日本経済はコロナ禍で打撃を受け、2021年も厳しい状況が続くそう。しかしそんな中において、テレワーク拡大による働き方改革、DX、新常态への対応など、新たな変化も起きている。それは危機を乗り越えてアフターコロナ時代を切り開く原動力となるものだ。

日本の歴史を振り返ると、我々の先人たちは様々な危機を乗り越え、ピンチをチャンスに変えてきた。その中から、ここでは渋沢栄一に注目したい。

周知の通り、渋沢栄一は明治時代に数多くの企業を設立し、日本経済の基礎を作った人物である。だが渋沢は何度も人生の危機に直面していた。

最初の危機は23歳の時だ。幕末の動乱期に尊王攘夷思想に目覚めた渋沢は、仲間と共に「高崎城を乗っ取って武器を奪い、横浜の外国人居留地を焼き討ちにして外国人を斬り殺す」という攘夷決行を計画したのだ。これは直前に中止したのだが、「もし実行していれば首が飛んでいた」と本人が後に回顧したように、間違いなく人生の危機だった。

計画を中止後、渋沢は身を隠すため京都に上った。京都では縁あって一橋家の用人・平岡四郎の知遇を得ていたが、幕府から嫌疑をかけられていることが分かり、平岡にも知られて、ついに進退窮まった。第2の危機である。

ところが渋沢の人物を評価していた平岡は、一橋家に仕えることを勧め、他に選択肢がなかった渋沢は本意ながらそれに従った。一橋家では主として領地の産業振興や財政改革を担当し頭角を現していく。危機を乗り越え新しい道を切り開いていったのだ。

その後、一橋家当主の慶喜が第15代将軍となり、それに伴い渋沢は幕臣となった。かつての

「敵」に仕えることになったのである。危機

とは言えないが皮肉な運命だ。しかしこれが渋沢に新たなチャンスを与えることとなる。1867年開催のパリ万博に幕府が出品することになり、代表団の随員を命じられたのだ。

パリ万博とその後の1年半にわたる欧州各地訪問を通じ、金融・経済・産業・技術から文化全般などに至るまで見聞を広めた。ここで得た知識や経験が、明治になって実業家として活躍する上で全面的に役立つことになる。

だがここで第3の危機に直面した。渋沢らを送り出した肝心の幕府が崩壊したのである。欧州滞在費用の送金も滞りようになり、1868年(明治元年)に帰国した。だが明治新政府はそのような渋沢に出仕するよう命じた。渋沢はまたまた本意ながら大蔵省の役人となったのだが、そこで貨幣制度や国立銀行条例制定など新しい国づくりの中核を担い、やがて民間に転じて実業家として大車輪の活躍を見せたのであった。

このような渋沢の人生は、そのまま当時の日本が幕末の危機を乗り越え明治の近代化を果たし、ピンチをチャンスに変えたという歴史と重なる。

もう一つ、渋沢は「利益追求と倫理(私利と公益)の両立」を提唱しているが、この考えは今日のESGやSDGsに近いと言える。コロナ禍を機にその重要性が再認識されているテーマである。アフターコロナに向けて、渋沢栄一から学ぶことは多い。

k

大阪経済大学客員教授／経済評論家。
日本経済新聞社編集委員、「ワールドビジネスサテライト(WBS)」マーケットキャスター、テレビ東京経済部長、テレビ東京アメリカ社長、理事・解説委員長などを歴任。